

【目的】科学技術の進歩や社会経済の発展に伴って、人々の価値観や生活様式も多様化してきた。このような社会では、消費者の衣生活に対する欲求や要求が量から質へ、質から感性へとより高度になってきている。このような現状での被服教育におけるデザイン指導では、美的な感性を育成することが重要である。本研究では、短大におけるデザイン教育を評価することを目的とし、短大生の入学時と卒業時にデザイン感覚に違いがみられるか感覚テストを実施して比較検討した。第1報（長崎県立女子短大紀要第42号）では、異なる母集団での比較を報告した。本報では、同じ母集団で比較した。

【方法】コンピュータ支援による感覚テスト問題を45問作成した。短大生47名を等質に2グループに分け、入学時にデザインの基礎について学習を実施した。グループ分けについては、コンピュータ支援による学習と教科書による学習グループである。教科書は、コンピュータ支援による学習と同じ教科書を作成し使用した。学習直後（入学時）の感覚テストの結果と卒業時の感覚テストの結果からデザイン指導を評価した。

【結果】感覚テスト得点の平均値は卒業時の方が高く、平均値の差に関するT検定では、入学時と卒業時でグループ間に有意差がみられた。分散に関するF検定では、特に有意な差はみられなかった。クラスター分析と数量化Ⅲ類によるテスト問題の分析の結果、卒業時の方が各問題の正答率が高く、しかも誤答の問題のパターン数が少なく、基本的な問題の誤答も少ない傾向にあることが明らかになった。特に、この結果についてはコンピュータ支援による学習グループの方が教科書による学習グループより顕著である。